

# コウヤマキ(さし木苗)

コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata*) の苗木は、一般的には実生でつくられています。さし木苗の育成は、栽培はやや困難であるといわれていますが、実生より育成期間が短縮でき、親木の性質を受け継いだ苗木をつくることができます。

## さし付けの時期

### ●さし付けに最適なのは 12月下旬～2月下旬

時期別さし木試験の結果(右図)より、12月下旬～2月下旬頃が、最も発根率が高く、さし付けの最適期と考えられます。さし木は、早ければ10月下旬頃から、遅くとも新芽の成長が始まる頃(おおむね4月下旬頃)までに行います。

## 床づくり

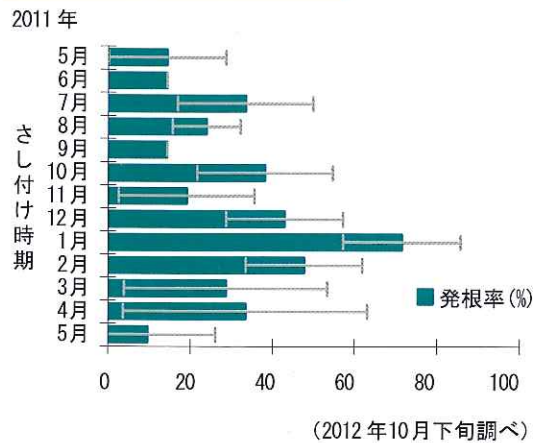
### 1 用土の選定

### ●バーミキュライトは発根率、根の量が大

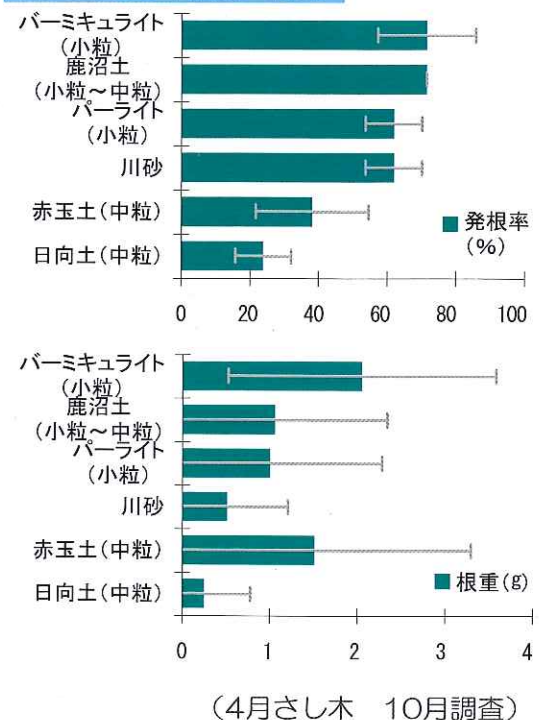
市販の園芸用土 6種類による用土別さし木試験の結果(右図)、バーミキュライト<小粒>は、発根率が高く、根の量(本数・重量)も多くなり、今回用いた中では最も適した用土であると考えられます。用土に、細かい粒子(みじん)が混ざっている場合は、それを除いて用います。さし木用土は、水持ちがよく、かつ通気性がよいことが条件であり、このような条件を満たせば、近くで得ら



## 時期別さし木試験 結果



## 用土別さし木試験 結果



## 用土別さし木試験

(さし木 6カ月後)



鹿沼土

バーミキュライト

れる山土なども用いることができます。ただし、腐植質の多い土壌や、菌類の多いものは避けま  
す。

## 2 さし床

### ●さし床には寒冷紗を設置

防風、防暑、防寒のため、寒冷紗やビニールシ  
ートが設置できるようにします。さし床は、排水  
がよく、水が停滞しないように高めにし、畝の崩  
れやすい土壌では、板などで枠を作ります。畝幅  
1m、溝幅 30~40 cm とします。箱ざしにする場合は、  
発泡スチロールなどの深さ 15~20 cm 程度の箱に、  
排水用の穴を開けて用います。箱ざしにすると、  
季節によって、成育に適した場所へ移動するこ  
とができます。用土の深さは、さし穂の長さの約 1/2  
(さし付け深さ) + 5 cm 程度 (根の伸びしろ) が  
必要です。さし床には、基本的に肥料を施さずにさし木を行います。



## さし穂の採取

### 1 さし穂の採取

#### ●採穂は 20 年生以下の若木から

母樹の樹齢や成育状況によって発根率、根系の発育に大きな差が出ます。できれば 20 年生以下  
の若木から充実した枝を選びます。同一の個体であれば、樹冠下部ほど発根が期待できます。

### 2 さし穂の形

#### ●さし穂にはバランスのとれた充実した枝を

さし穂の形は、徒長しないで、側枝の着生が片寄らず均整がとれ、主枝が比較的太く、曲がり  
の少ないものが望ましいと考えられます。頂芽がなくても発根しますが、天ざし (頂芽の付いた  
穂をさす方法) が一般的です。

## 穂づくりと発根促進処理

### 1 穂木の取り扱い

#### ●穂木は涼しいところで保管

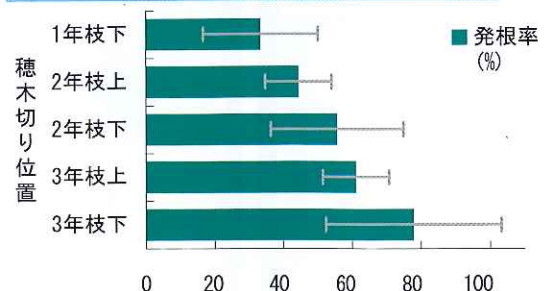
穂木は、高温になるほど呼吸や蒸散が進み、養分や水分が失われて発根しにくい状態になっ  
てきます。さし付けまでのあいだ、車内や屋外の高  
温になる場所には、長時間置かないようにします。  
穂先を水につけて涼しい場所に置き、採穂当日か  
ら数日のあいだにさし木を行うようにします。

### 2 穂の年齢と長さ

#### ●さし穂枝齢が高いほど発根率は良好

長さ 10cm 未満の枝をさしても発根しますが、  
25cm 程度までは、穂先切り位置の枝齢が高いほど  
発根しやすい傾向があります (右図)。

穂木切り位置枝齢別さし木試験 結果



### 3 穂づくり

#### ●穂先はだ円形切り返し、地上に出る枝葉はできるだけ残す

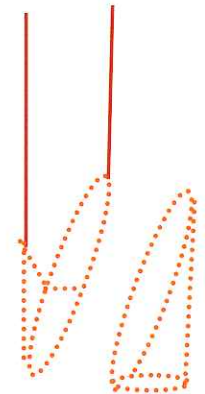
まず、最終的にさし付ける大きさより 3~5 cmほど長めに枝を切ります。穂先をつくる道具は、よく切れるものであれば剪定ばさみでも小刀でもよく、使いやすい方を用います。

切り口の形は、さし付けるときにつぶれたり皮がむけたりせず、土と密着しやすい形にします。よく用いられる切り方は、斜め切りにしたあと、尖った穂先の反対側から鈍角に切り返す「だ円形切り返し」です（右図）。

穂に残す葉や枝が多いほど貯蔵養分が多くなり、発根量も多くなりますが、蒸散が進みさし床の乾燥が早まって枯死しやすくなることも考えられます。日覆いや十分な灌水によって、さし床とその周辺が乾燥しないように管理できる場合は、さし穂の上半分の枝葉は、全て残します。やむをえず乾燥しやすい条件下で育成する場合は、葉の 5~6 割を除きます。

発根促進に関しては、穂先をオキシベロン 200~300ppm 溶液に 1 昼夜浸漬することによる効果の可能性が報告されていますが、発根促進剤を使用しなくても、さし付け時期、用土の選定、さし穂の採取、穂づくりの条件を整えることで、発根率が高まります。

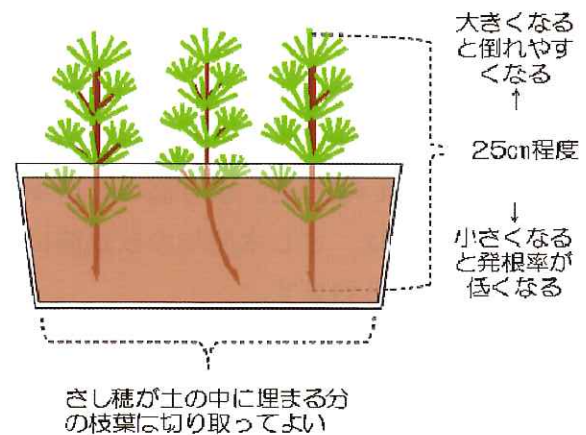
さし穂切り口



### さし付け方法

#### ●地上部が垂直になるよう土にしっかりとさす

さし穂がうごくで発根しにくくなるので、しっかりとさし付けます。穂木の間隔は 5 cm 程度です。さし穂は長さの 1/3~1/2 のところまでさし付け、長めのさし穂の場合、苗床の内側へ向けてさし穂どうしがもたれ合うようにします。さし穂よりやや太めの案内棒を、さし付ける深さより心もち浅いところまでさし込んだあと、引き抜きながら周りの土が元に戻る前にさし穂を案内棒に沿わせてすばやくさし込みます。穂先が穴の底に着いたら、切り口が土に密着するように軽く押しつけます。そして、さし穂が倒れないよう根元の土を押さええます。パーミキュライトの場合、案内棒であらかじめ穴を開ける必要はありません。さし付け後、地上部分が斜めになっていると、新芽の根元が一度曲がって垂直に立ち上がり、形が悪くなります。曲がりのあるさし穂は、穂先を斜めにさし込み、地上部分が垂直になるようにします。



## さし付け後の管理

### 1 日覆い

#### ●遮光を調節しながら日覆いを設置

さし木直後から寒冷紗などで日覆いを行います。日覆いは、夏の暑さと乾燥、また、強風を軽減する役割も果たすので、これらの影響を受けやすい場所で育成しなければならない場合には、厚めに寒冷紗をかけたり、よしずを用いたりして対処します。さし床上面だけでなく、側面も覆うようにします。1年中常に遮光が強いと、光合成が十分できず、発根後の成育がわるくなってくるので、季節によって調節します。

### 2 灌水

#### ●育成初期は水を切らさない

さし木苗の育成初期には、水を切らさず灌水する方が、枯死する苗も少なく、より多くの苗が得られます。箱ざしの場合、箱の底2~3cmを新鮮な水に常に浸す「プール灌水」は、水はけのよい用土を用いれば、根ぐされすることなく省力的に灌水を行う方法として活用できます。

## 床替え

#### ●床替えはさし木翌年の秋以降

発根時期の調査結果（右図）より、4月にさし付けを行い、初めて発根が見られたのは、5カ月目の9月以降でした。その後、3月までは、約2割~3割程度の発根率でしたが、2年目の7月には約5割となっていました。より高い得苗率を得るために、床替えは、さし木翌年の秋以降に行った方がよいと考えられます。

### 参考資料

コウヤマキのさし木育苗試験 奈良県林業試験場試験研究報告 No.5 (1974)

「樹木のふやし方」関西地区林業試験研究機関連絡協議会育苗部会 編 (1980)

さし付けから5カ月目

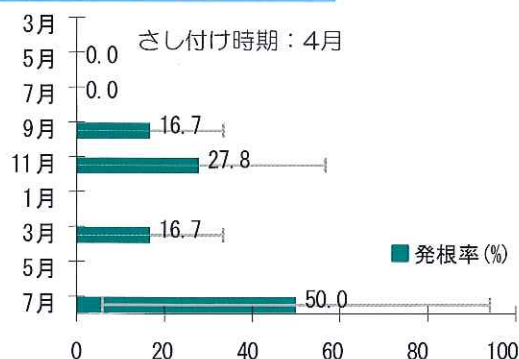


さし付けから17カ月

4月さし木 翌年7月掘り取り



発根時期の調査 結果



編集・発行 和歌山県林業試験場

〒649-2103 和歌山県西牟婁郡上富田町生馬1504-1

TEL 0739-47-2468 FAX 0739-47-4116

HP <http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070109/gaiyou/006/index.html>

平成25年3月 発行

■地球環境保護のため、  
植物油インクを使用しています。

